

## 演習 刑事訴訟法 2023年11月号参考文献

一橋大学教授 緑 大輔

\*学習者が比較的容易に手にとることができる文献を中心に掲げる（一部、やむを得ず論文集等を掲げる場合がある）。

### 1. 証拠の関連性の概説

- ・川出敏裕『判例講座刑事訴訟法 捜査・証拠篇〔第2版〕』（立花書房，2021年）309-329頁。
- ・宇藤崇ほか『刑事訴訟法〔第2版〕』（有斐閣，2018年）357-363頁。
- ・酒巻匡『刑事訴訟法〔第2版〕』（有斐閣，2020年）497-504頁。
- ・池田公博=笹倉宏紀『刑事訴訟法』（有斐閣，2022年）189-192頁。
- ・田淵浩二『基礎刑事訴訟法』（日本評論社，2022年）226-228頁。
- ・吉開多一ほか『基本刑事訴訟法II 論点理解編』（日本評論社，2021年）202-209頁。
- ・斎藤司『刑事訴訟法の思考プロセス』（日本評論社，2019年）317-332頁。

### 2. 証拠の関連性と類似事実・被告人の性格を示す証拠

- ・古江頼隆『事例演習刑事訴訟法〔第3版〕』（有斐閣，2021年）316-334頁。
- ・池田公博「同種前科・類似事実による立証」法教482号（2020年）109頁以下。
- ・成瀬剛「類似事実による主観的要件の立証」『井上正仁先生古稀祝賀論文集』（有斐閣，2019年）545頁以下。
- ・井上和治「類似事実による犯人性の立証——栗原傷害致死・死体遺棄事件を素材として」法学84巻1号（2020年）43頁以下。
- ・長沼範良=園原敏彦「類似事実の立証」法教338号（2008年）71頁以下。
- ・遠藤邦彦「類似事実に関する証拠の許容性，関連性，必要性の判断基準」判タ1419号（2016年）35頁以下。
- ・高平奇恵「悪性格証拠の推認過程の明確化の必要性——イギリスの相互の許容性に関する議論を参考に」大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀祝賀論文集『刑事法学と刑事弁護の協働と展望』（現代人文社，2020年）528頁以下。

### ステップアップ

補助事実として類似事実を用いることの可否を問うものである。裁判例の中には、被告人の弁解内容の信用性を否定するために、被告人の類似事実を用いることを許容しているように読めるものも確認できる（東京高判令和元年5月15日判時2441号63頁）。当該事件では、強制わいせつ致傷の事実で起訴された被告人が、わいせつ目的ではなく、女子高校生一般に対する復讐心から傷害を加えた旨を弁解したのに対して、「その弁解が信用できない理由の一つとして」被告人の類似事実を述べた証人の証言を用いた原審の判断を適法だとしている。適否も含めて考えてみるとよいだろう。